

## 観音物語(3) 大<sup>だい</sup>清<sup>せい</sup>浄<sup>じやう</sup>願<sup>がん</sup>

弘<sup>くわい</sup>誓<sup>げい</sup>深<sup>しん</sup>如<sup>にょ</sup>海<sup>かい</sup> 歴<sup>りやく</sup>劫<sup>こつ</sup>不<sup>ふ</sup>思<sup>し</sup>議<sup>ぎ</sup> 侍<sup>じ</sup>多<sup>た</sup>千<sup>せん</sup>億<sup>おく</sup>仏<sup>ぶつ</sup> 発<sup>はつ</sup>大<sup>だい</sup>清<sup>せい</sup>浄<sup>じやう</sup>願<sup>がん</sup>  
弘誓の深きこと海の如し 劫を歴ても思議せられず 多く千億の仏に侍して 大<sup>だい</sup>清<sup>せい</sup>浄<sup>じやう</sup>願<sup>がん</sup>を發せり

釈迦牟尼仏は、はるか遠くの空に眼をこらした。そして、両手をゆっくと天にひろげた。  
「観世音菩薩の誓いは、あの空よりも高い」  
両手を下ろしつつ、はるか地平線に眼を移す。  
「あの海よりも深い」  
世尊は、ひろげた両手を胸の前で握りしめた。そして、二つの拳を小刻みに振った。  
「観世音菩薩の大<sup>だい</sup>清<sup>せい</sup>浄<sup>じやう</sup>願<sup>がん</sup>は、金剛石よりも固い」  
左の拳を左膝に当ててひろげ、右はそのまま胸に押し当てた。  
「観世音菩薩の誓いは固い固い決意である」  
さらに、胸の拳を右膝の前に下ろし、人差し指を大地に向けて高座の床に接触させた。触地印である。触地印とは、悪魔を寄せつけけない強い意志を表わす。この印は、会場を乱さず、聴衆の心を鎮めるためでもある。平素はことさらに振る舞うことがない世尊であるが、観音菩薩の偉大さを表現するために、かなり大袈裟に手振りを使った。  
「観世音菩薩は、無数の仏に仕えて修行をくりかえした結果、この世の中を清浄にしたいと誓願を立てたのである」  
八万四千の大衆も首を縦に振ってうなずいた。  
「無尽意よ、汝の願いはどのようなものか」  
「恥ずかしいことに、観世音菩薩の大<sup>だい</sup>清<sup>せい</sup>浄<sup>じやう</sup>願<sup>がん</sup>にはとても及びません。しかし、私には、尽きることのない仏への強い憧れがあります。それゆえに、世尊より無尽意という名前をいただきました」  
「ああ、そうであったな。汝の仏への思念は誰にも負けぬ無尽の決意がある」  
「ところで無尽意よ、観世音菩薩の大<sup>だい</sup>清<sup>せい</sup>浄<sup>じやう</sup>願<sup>がん</sup>には平等の精神があるが、汝ならばその意味がわかるであろう」  
「はい。平等とは差別がないということです。私欲は差別です。無欲は平等です。無私無欲は、清らかな平等精神から生まれます」  
「然り、その通りである」  
「ありがとうございます」  
「観世音菩薩は娑婆世界で衆生とともに楽しく遊んでいるというが、どのような遊びであろう」  
「衆生と遊ぶということは、親が子どもと一緒に遊ぶようなものです」  
「なるほど」  
「幼子と公園で砂遊びをしてみましょう。親がおもちゃのスcoopで遊べば、子どもは親のスcoopを欲しがります。スcoopを与えて、親がおもちゃのバケツで遊べば、子どもはスcoopを捨ててバケツを欲しがります」  
「うむ」  
「幼子はすぐに親の真似をします。そして、スcoopで砂をすくってバケツに入れることを覚えます。バケツの砂をひっくり返して山を作り、葉っぱや枝を差したり、トンネルを掘ったりして、家へ帰ることも忘れて遊びます。」  
「うむ」  
「スcoopもバケツも遊ぶ道具です。経済も、政治も、家庭も、みんなが生きる道具です。楽しくいっしょに遊ぶ仲間の広場です。そこへ観世音菩薩が交わって遊べば、世間は自然に清められていきます」  
「うむ、面白い。地藏菩薩よ、どう思うかね」  
「はい。私も子どもと戯れることが大好きです。幼子は純真無垢で、心が洗われます。ましてや、女性のようなやさしい観世音菩薩と一緒に遊べば楽しくて仕方ありません。願いは尽きません。健康で、豊かに、仲良く、心配のない人生をおくりたいと、誰もが望みます。願いによって社会が動き、世の中を創っていきます。合掌、水ごり、読経、お護摩、仏像を刻み、寺院を荘厳することなど、祈りの姿は切なる心願が形に表れたものです。観世音菩薩が娑婆で遊ぶだけで、人々の願いが清められ、社会が浄化されていくのは明白な道理です」  
「地藏菩薩よ、よくぞ教えてくれた」  
会場の中ほどで、観音菩薩が傾聴している。周囲はまだ菩薩に気づいていない。しかしこの後、会場は前代未聞の場面に展開する。企画は世尊、演出は観音菩薩である。